

哲学 専攻 領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）  
試験科目：第 1 外国語（英語） / 専門科目（ ）  
試験時間：（ 60 ）分

後の文章について以下の問いに答えなさい。

問1 段落1の下線部は何を言おうとしているのか。日本語で簡潔に説明しなさい。

問2 the principle of utility とは何か。日本語で簡潔に説明しなさい。

問3 段落3の内容を日本語で簡潔に説明しなさい。

問4 段落5の下線部のように言える理由は何か。日本語で簡潔に説明しなさい。

問5 段落8を日本語に直しなさい。

問6 What do you think of this passage? Write your thoughts briefly in English.

1. Nature has placed mankind under the governance of two sovereign masters, pain and pleasure. They alone point out what we ought to do and determine what we shall do; the standard of right and wrong, and the chain of causes and effects, are both fastened to their throne. They govern us in all we do, all we say, all we think; every effort we can make to throw off our subjection to pain and pleasure will only serve to demonstrate and confirm it. A man may claim to reject their rule but in reality he will remain subject to it. The principle of utility recognises this subjection, and makes it the basis of a system that aims to have the edifice of happiness built by the hands of reason and of law. Systems that try to question it deal in sounds instead of sense, in caprice instead of reason, in darkness instead of light. But enough of metaphor and declamation! It is not by such means that moral science is to be improved.

2. The principle of utility is the foundation of the present work, so I should start by giving an explicit and determinate account of what it is. By 'the principle of utility' is meant the principle that approves or disapproves of every action according to the tendency it appears to have to increase or lessen—i.e. to promote or oppose—the happiness of the person or group whose interest is in question. I say 'of every action', not only of private individuals but also of governments.

3. By 'utility' is meant the property of something whereby it tends to produce benefit, advantage, pleasure, good, or happiness (all equivalent in the present case) or (this being the same thing) to prevent the happening of mischief, pain, evil, or unhappiness to the party whose interest is considered. If that party is the community in general, then the happiness of the community; if it's a particular individual, then the happiness of that individual.

4. 'The interest of the community' is one of the most general expressions in the terminology of morals; no wonder its meaning is often lost! When it has a meaning, it is this. The

community is a fictitious body composed of the individuals who are thought of as being as it were its members. Then what is the interest of the community? It is the sum of the interests of the members who compose it.

5. It is pointless to talk of the interest of the community without understanding what the interest of the individual is. A thing is said to 'promote the interest' (or be 'for the interest') of an individual when it tends to increase the sum total of his pleasures or (the same thing) to lessen the sum total of his pains.

6-7. An action then may be said to conform to the principle of utility. . . . when its tendency to increase the happiness of the community is greater than any tendency it has to lessen it. And the same holds for measures of government, which are merely one kind of action performed by one or more particular persons.

8. When someone thinks that an action (especially a measure of government) conforms to the principle of utility, he may find it convenient for purposes of discourse to imagine a kind of law or dictate of utility and to speak of the action in question as conforming to such a law or dictate.

## 哲学専攻

専攻

領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 2 外国語（日本語） / 専門科目（ ）

試験時間：（ 60 ）分

以下の文章は、明治期の日本を代表する作家、夏目漱石（1867-1916）の有名な講演「現代日本の開化」（1911 和歌山）の一部である。全文をよく読んで、以下のすべての問いに、日本語で解答せよ。

（出典：三好行雄編『漱石文明論集』岩波書店 1986）

33 現代日本の開化

これだけ説明して置いて現代日本の開化に後戻りをしたら大抵大丈夫でしょう。日本の開化は自然の波動を描いて甲の波が乙の波を生み乙の波が丙の波を押し出すように内発的に進んでいるかというのが当面の問題なのですが残念ながらそう行っていないので困るのです。行っていないというのは、先ほども申した通り活力節約活力消耗の二大方面において丁度複雑の程度二十を有しておいた所へ、俄然外部の圧迫で三十代まで飛び付かなければならなくなつたのですから、あたかも天狗にさらわれた男のように無我夢中で飛び付いて行くのです。その経路は殆んど自覚していない位のもので、元々開化が甲の波から乙の波へ移るのは既に甲は飽いていたたまれないから内部欲求の必要上するりと新しい一波を展開するので甲の波の好所も悪所も酸いも甘いも嘗め尽した上に漸く一生面を開いたと行って宜しい。従って従来経験し尽した甲の波には衣を脱いだ蛇と同様未練もなければ残り惜しい心持もしない。のみならず新たに移つた乙の波に採られながら毒も借り着をして世間体を繕っているという感が起らない。ところが日本の現代の開化を支配している波は西洋の潮流でその波を渡る日本人は西洋人でないのだから、新しい波が寄せる度に自分がその中で食客をして気兼ねをしているような気持になる。新しい波はとにかく、今しがた漸くの思で脱却した旧い波の特質やら真相やら真相やらも弁えるひまのないうちにもう棄てなければならなくなつてしまつた。食膳に向つて皿の数を味い尽す所か元来どんな御馳走が出たかハッキリと眼に映じない前にもう膳を引いて新しいのを並べられたと同じ事であり、また、こういう開化の影響を受ける國民はどこかに空虚の感がなければなりません。またどこかに不満と不安の念を懐かなければなりません。それをあたかもこの開化が内発的でもあるかの如き顔をして得意でいる人のあるのは宜しくない。それはよほどハイカラです、宜しくない。虚偽でもある。軽薄でもある。自分はまだ煙草を喫つても毒に味さえ分らない子供のくせに、煙草を喫つても毒を言ふような風をしたら生意気でしょう。それを敢てしなければ立ち行かない日本人は随分悲酸な國民といわなければならぬ。開化の名は下せないかも知れないが、西洋人と日本人の社交を見てもちょっと気が付くでしょう。西洋人と交際をする以上、日本本位ではどうしても旨く行きません。

〔甲略〕

しこうして強いものと交際すれば、どうしても己を棄てて先方の習慣に従わなければならなくなる。我々があの人は肉刺の持ちようも知らないとか、小刀の持ちようも心得ないとか何とかいって、他を批評して得意なのは、つまりは何でもない、ただ西洋人が我々より強いからである。我々の方が強ければあつちこつちの真似をさせて主客の位地を易えるのは容易の事である。がそゝ行かないからこつちで先方の真似をする。しかも自然天然に発展して来た風俗を急に変える訳にかぬから、ただ器械的に西洋の礼式などを覚えるより外に仕方がない。自然と内に醗酵して醸された礼式でないから取ってつけたようでも甚だ見苦しい。これは開化じゃない、開化の一端ともいえないほどの些細な事であるが、そういう些細な事に至るまで、我々の遣っている事は内発的でない、外発的である。これを一言にいえば現代日本の開化は皮相上滑りの開化であるという事に帰着するのである。無論一から十まで何から何までとは言わない。複雑な問題に対してそう過激の言葉は慎まなければ悪いが我々の開化の一部分、あるいは大部分はいくら己惚れて見ても上滑りと評するより致し方がない。しかしそれが悪いからお止しなさいというのではない。事実やむをえない、涙を呑んで上滑りに滑って行かなければならないというのです。

百年の経験を十年で上滑りもせず遣いとけようとするならば年限が十分一に縮まるだけわが活力は十倍に増さなければならぬのは算術の初歩を心得たものさへ容易く首肯する所である。これは学問を例に御話をするのが一番早分りである。西洋の新らしい説などを生嚙りにして法螺を吹くのは論外として、本当に自分が研究を積んで甲の説から乙の説に移りまた乙から丙に進んで、毫も流行を追うの陋態なく、またことさらに新奇を銜うの虚栄心なく、全く自然の順序階級を内発的に経て、しかも彼ら西洋人が百年も掛って漸く到着し得た分化の極端に、我々が維新後四、五十年の教育の力で達したと仮定する。体力脳力共にわれらよりも旺盛な西洋人が百年の歳月を費したものを、如何に先駆の困難を勘定に入れないにした所で僅かその半に足らぬ歳月で明々地に通過しおわるとしたならば吾人はこの驚くべき知識の収穫を誇り得ると同時に、一敗また起つ能わざるの神経衰弱に罹って、氣息奄々として今や路傍に呻吟しつつかあるは必然の結果として正に起るべき現象でありましょう。現に少し落ち付いて考えて見ると、大学の教授を十年間一生懸命にやったら、大抵の者は神経衰弱に罹りがちじゃないでしょうか。ピンピンしているのは、皆嘘の学者だと申しては語弊があるが、まあどつちかといえは神経衰弱に罹る方が当り前のように思われます。学者を例に引いたのは単に分りやすいために、理窟は開化のどの方面へも応用が出来るつもりです。

【問題 1】傍線①「開化の影響を受ける国民はどこかに空虚の感がなければなりません」と漱石が述べるのは何故か。

【問題 2】傍線②「涙を呑んで上滑りに滑っていかねばならない」というのは、どういう心情の反映だろうか。

【問題 3】漱石は日本の開化（近代化）の歴史をどう評価しているか。

【問題 4】今日から見て、漱石の指摘に学ぶ点があるだろうか。

哲学

専攻

領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 2 外国語（ドイツ語） / 専門科目（ ）

試験時間：（ 60 ）分

Aus : Robert Spaemann, Christentum und die Philosophie der Neuzeit, in :  
ders., Das unsterbliche Gerücht. Die Frage nach Gott und die Täuschung  
der Moderne, Klett -Cotta Verlag. Stuttgart 2007. S. 65 - 66; 66 - 67

哲学 専攻 領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 外国語（ ） / 専門科目（ 哲学史 ）

試験時間：（ 60 ）分

I. 以下の用語・文言について、これを使用した哲学者名を入れながら説明しなさい。

- ① 現実態と可能態
- ② 五つの道
- ③ 方法的懐疑
- ④ 物自体
- ⑤ 被投的企投

II. 以下のテーマから一つを選び、関連する主要な哲学者名を記しながら、その史的展開を詳述しなさい。

- 1) イギリス経験論
- 2) ドイツ観念論
- 3) 分析哲学
- 4) プラグマティズム
- 5) 実存哲学